

それをみてある人のいはく、かきつばたといふ五もじを、句のかみにすへて、たびの心をよめといひければ、よめる、

から衣きつ、なれにしつましあれば、はるくきぬる旅をしぞおもふ、とよめりければ、みない人かれいひのうべに涙おとして、ほとびにけり、

〔伊勢物語古意〕かれひは乾飯也、和名抄に餉を加禮比於久留とも、加禮比とのみもよめり、いにしへよりかれいひを略してかれひといいる也、いを略せる例、もちいひをもちひと云類也、

旅首註にかれ飯を持は、昔の常也、今も山中へ入人は、こは飯を干てもたるをばちひさき布帛に

とりわかちて水に打入、即引上て駄のかたへなどに付おくに、ほどなくほとびてもこのこは飯となる也、こはいにしへは驛の遠くてせんかたなく、又野山の旅には必用意せし物也、ある人餉をかれひおくとよむにつきて、かれ飯は世の常の飯也といへるはわろし、今の常の飯はいにしへかた粥と云ふ物にてこそあれ、昔も今もかれひと云は、こは飯を干たる物のみ、○下略

〔古今和歌集九羈旅〕たぢまのくにのゆへまかりける時に、ふたみの浦といふ所にとまりて、夕さりのかれいひ。ひ。たうべけるに、ともにありける人々、歌よみけるついでによめる、

藤原のかねすけ○歌略

〔空穂物語 俊隆二〕御ともにかぎりなくむつまじきかぎりの人二人、われと御むまにのりて○中略

いづくとも人にはのたまはで、ほし。い。る。た。す。こし。る。ぶ。く。ろ。に。入。て。い。と。忍。び。て。お。は。し。ま。す。

〔日本紀略六圓融〕天延三年五月廿九日庚子、今夜大炊寮糲、御倉、盗人開之、以空車三輛運取之、

〔榮花物語十玉臺八〕御厨子所の方をみれば、○中略又干飯などいふものをめし出て、池ほり木どもひく

ものにたまふ、かの信解品の窮子の様なる、めしあつめては、いまをのく、にぞなどたまはすべ